

会 議 記 録

次の審議会（協議会）を下記のとおり開催したので報告します。

審議会等名称	第2回近江八幡市家庭教育推進協議会		
開催日時	令和8年2月24日（火）10:00～11:30		
開催場所	金田コミュニティセンター 中会議室		
出席者 ※会長等◎ 副会長等○	<委員> ○山岡委員 中島委員 益田委員 富岡委員 永峰委員 杉 委員 谷口委員 <事務局> 万野課長補佐 古本指導主事 富永指導主事		
次回開催予定日	令和8年 5月		
問い合わせ先	所属名：近江八幡市教育委員会事務局生涯学習課 担当者名：富永 祐加 電話番号：0748-36-5533 E-mail：045000@city.omihachiman.lg.jp		
会議記録	発言記録	・ 要約	要約した理由 発言内容が整理され、記録として残すのに適しているため
事務局	1 開会 定刻となったため、令和7年度第2回家庭教育推進協議会を開会した。本会議の議事録は市の規定に基づきホームページ等で公開されること、また記録のため録音および写真撮影を行うことを説明した。		
課長補佐	2 課長補佐あいさつ 保護者の精神的負担の増大や虐待等の問題が社会課題となる中、本市では「家庭の孤立防止」と「家庭基盤の安定」が子どもの健やかな成長に繋がると考え、支援を強化してきた。今年度は特に、家庭教育支援員の連携強化や子育てサロンを通じた保護者同士のネットワーク作りに注力した。本日は来年度に向けた建設的な意見をいただきたいと挨拶した。		
副会長	3 副会長あいさつ 会長欠席のため、副会長が進行を務める旨を伝えた。保護者が一		

人で悩みを抱え込まないように、各施設や団体の立場から知恵を出し合い、有意義な交流としたいと挨拶した。

4 令和7年度近江八幡市家庭教育支援基盤構築事業取組報告

【資料に基づき、今年度の実績を報告した。】

家庭教育支援員の配置：各小学校に配置し、家庭訪問や相談、校内サロン等の直接的支援を実施した。活動時間は計1,450時間と微減しているため、質的な向上に努める必要がある。

子育てサロンの運営：年5回開催。今年度は家庭教育支援員の協力を得て、支援員の存在を周知しつつ、保護者が繋がれる場を運営した。

課題と今後：共働き世帯の増加により、家庭教育支援員の平日の活動や市のサロンの平日開催では支援が届きにくい現状がある。今後は家庭教育支援員の活動を広く発信するとともに、学校との連携をさらに深化させると挨拶した。

5 各所属での今年度の保護者支援や家庭の教育力向上に関わる取組について

【困難を抱える家庭へのアプローチと専門的知見の活用】

「専門的な対応が必要な家庭」になる手前の段階で、いかに食い止めるかが極めて重要である。民間団体の現場では、すでに問題が深刻化し、30代、40代と長年ひきこもっているケースに直面することが多い。

こうした家庭では、保護者が「自分の育て方のせいだ」と強く自責し、パニックやシャットアウトの状態に陥っている。そうになると冷静な対話は困難であり、学校側が良かれと思って提案する「登校の促し」などが、かえって保護者を追い詰め、拒絶反応を招く要因にもなり得る。

まずは保護者自身が冷静になれるよう、役割を分担して連携していく必要がある。また、不登校の子どもにとってスマートフォンは唯一の社会との繋がりである場合も多く、一概に否定はできない。児童精神科医の関正樹先生のような専門家の知見を借り、スマホとの適切な距離感や、本人を否定しない関わり方を保護者とともに考えていくべきである。まずは「お父さんやお母さんが繋がること」を目標とし、そこから次の枝を伸ばしていく支援が求められていると強調した。

【家庭教育支援員による実践報告と現場の課題】

支援員活動において、ひとり親家庭や多忙な家庭が多く、平日の催しに参加しにくい実情がある。特に困り感を抱える保護者ほど学

事務局

委員

委員

校への警戒心が強く、介入が難しい場合もあるが、自身の取り組みを通じて手応えも感じている。

例えば、1年生の「昔遊び」や、夏休みの「体験学習（お抹茶体験）」などの行事を通じて、保護者と子どもの変化を目の当たりにした。当初、母親から離れられなかった児童が、活動を通じて友達と打ち解け、2学期にはスムーズに登校できるようになった事例がある。また、クリスマス時期のケーキ作りサロンを通じて、これまで繋がりのなかった保護者同士の交流も生まれた。

こうした活動から、親しか知らない世界にいた子どもが「友達と繋がる瞬間」を親が見守り、安心感を得ることが、登校支援や家庭の安定に直結すると実感している。一方で、こうした場に足を運べない、あるいは学校の先生を「敵」のように感じてしまうほど追い詰められている保護者をどうキャッチし、繋いでいくかが今後の大きな課題であると述べた。

委員

現場では、母親自身が誰とも繋がれず、孤立している様子が非常に強く感じられる。家庭内でも「学校へ連れて行け」と責められ、精神的に疲弊しきっている母親が多く、その役割をいかに支えるかが重要である。「家に人を呼ぶことへの抵抗」や「自分が何とかしなければ」という心理的障壁が支援を拒む大きな要因となっている。まずは母親がほっとできる居場所を確保し、父親との温度差による孤独感も含めてケアする必要がある。家庭内の緊張を解きほぐし、支援を拒む心の壁を取り除いていくための柔軟なアプローチを検討すべきであると指摘した。

委員

集団や保護者同士の繋がりを苦手とする方に対し、個別に対応することを最優先している。形式的な「相談」ではなく、お茶を飲みながら話すような気軽な茶話会（サロン）から始めることが、安心感の醸成に繋がっている。担任一人に負担を集中させず、職員間や教育相談員、関係機関との「チーム力」で保護者を支える体制を構築している。地域住民による子育てサロンなどの小さな交流の積み重ねこそが、将来的に深刻な事態に陥った際の、相談の入り口やセーフティネットになると確信していると述べた。

委員

学校の特性を最大限に活かし、不登校児童をオンラインで教室と繋ぐなどの多様な試みを紹介した。無理に顔出しや発言を求めず、チャットや「あっち向いてホイ」などの遊びを通じて他者との接点を作ることで、本人や保護者が「自分たちはこの場所に認められている」と感じられる感覚を育てている。こうした小さな成功体験や変化を家庭と共有し、学校側が歩み寄る姿勢を見せ続けることが、保護者の不安を和らげ、信頼関係を再構築する鍵になるとの認識を示した。

委員	<p>昨年度から各校の報告会に保健師が同席するなど、教育に福祉の視点を取り入れる体制を強化している。教育現場の視点だけで解決しようとはせず、福祉分野と情報を共有し、多角的な支援体制を構築していく必要性を感じている。学校や市の相談室に来られるケースにおいても、家庭等、問題の背景は多様であり、同じ教育委員会内での情報共有や連携を密にすることで、専門的な対応が必要な家庭への早期発見・早期支援に繋げたい。多機関連携による「面」でのサポート体制を推進していくべきであると述べた。</p>
副会長	<p>【総括：支える人を支える存在】</p> <p>各委員の提言や実践報告、意見を通じ、「繋ぎたいが手が届かない」という共通の葛藤が浮き彫りになった。保護者が学校を「否定される場所」と捉えて身構えてしまう背景には、社会や家庭内からの強いプレッシャーがある。</p> <p>重要なことは、担任を支える組織、保護者を支える地域、のような「支える人を支える存在」である。自己責任を問うのではなく、失敗を許容し、話を柔らかく受け止める。委員が述べた「親がまず繋がる」という視点や、委員が示した「親子がほっとできる場」の創出こそ、家庭教育支援の第一歩であり、支える人を支える存在として行政の役割についても考える必要があると総括した。</p>
事務局	<p>6 閉会・事務連絡</p> <p>3月5日開催の近江八幡市子育てサロンについて案内した。また、令和8年度からは家庭教育支援をさらに強化する方針を伝え、引き続きの協力を依頼した。</p>
副代表	<p>本日の議論を各活動に持ち帰り、卒業式を控えた時期だからこそ、悩む子どもや保護者が「困った時に連絡できる場所」があることを伝えていきたい。以上をもって閉会するとし、第2回協議会を終了した。</p>
	<p>終了</p>

担当課⇒総務課